Passage to India 試論
——Nietzsche との照応のもとに——

斎　藤　和　夫

1．序論——年譜に見る Whitman と Nietzsche——

Walt Whitman（1819－92）と Friedrich Nietzsche（1844－1900）とは，前者が約一世代年長であり、その代表的作品の発表年代も大略それだけ前後しているが，両者とも 19 世紀後半を代表し，かつ新旧両大陸を代表する詩人・思想家であった。それにもかかわらず，この両者や互に相識ることが遂になかった。Whitman 老年期の散文作品に Nietzsche の名は一度も現われることなく，また亀井俊介の「近代文学におけるホイットマンの運命」にあるごとく，Nietzsche が Whitman を読んだ形跡はないのである。(1)

Whitman がドイツに紹介されたのは比較的早く，1970 年頃とされているが，おもに南北戦争に関する詩が注目され，その思想の全貌が「草の葉（*Grashalme*）」の形でドイツに現われたのは，1889 年，T. W. Rolleston と Karl Knortz の共訳によるものであった。（この時には Nietzsche の意識は昏迷の底にあり，かれの思索者としての生涯は終っていたのである。）また，Nietzsche の作品，就中 *Also Sprach Zarathustra* が 1 部から 4 部まで纒められて公刊の形を整えたのは，1892 年，すなわち Whitman の没年であった。

この両者を比較対照し，その類似性と相異点とを考究するとき，この両者を互いに影響関係等のないものとして扱かい得ることは，それぞれの identity を確立して追究し得る大きな利点となるであろう。

2．ドイツにおける Whitman 熱の高揚と Nietzsche

前述のような両者の無関係ともいうべき関係にもかかわらず，19 世紀末葉にドイツにおいて Whitman に対する関心が急速の高揚したとき，その高揚が Nietzsche

との関連，彼我の類似性を媒体としたものであったことは，注目に値することである。詳細は前記亀井俊介の著書に譲るべきであるが，要点のみを引用すると，

「・・・こうしてWhitmanは次第にドイツ思想・文学のなかに組み入れられてきた。だがこの詩人をBöhmeやSilesiusやHamannと並べて説くことに異論はないとしても，なにか隔靴掻痒の思いがする。現代のドイツにおいてWhitmanと肩を並べて論じ得る人はいないものだろうか。そう思ってあたりを見廻わしたとき，人は格好の人物を見出した。Friedrich Nietzscheである。・・・彼（Nietzsche）はWhitman同様ディオニュソス的激情をもち，偉大な個性を重んじ，完全な人間性を求めた。・・・Nietzscheの「超人」は，Whitmanの「自己」と似ていた。ともに否定的現実から偉大な肯定への飛躍の意思の産物であった。・・・彼らはこの頃（1890年代後半）から，このふたりの類似性に次第に注目し，その観点からWhitmanを語るようになっていった。この事実自体，ドイツにおけるWhitmanの理解が深まってきたことのあらわれであったと言えよう。・・・最初にWhitmanをNietzscheと並べて論じたのは，詩人のJohannes Schlafではなかろうか。・・・1896年の*Neuland*誌上でかれがWhitmanをNietzscheと並べたのは，このWhitmanの『力』への認識があったに違いない。・・・かれのWhitmanとNietzscheとの関係への注目は評価すべきものだし，またかれがWhitmanを社会主義とNietzscheとの両者のあいだにとらえたことは・・・Whitmanのふたつの面――政治詩人としてのWhitmanと神秘的思想家としてのWhitmanとの二面――を一応総合して理解したものとして認めるべきであろう。そして，このSchlafによって，Whitmanはドイツ人のあいだに急速にひろまっていくことになったのである。[2]」

しかし，このあとSchlafは，1901年刊行のKraus-Ettlinger訳のWhitman小説集の序文において，ラテン的デカダンスに傾いたNietzscheよりもはるかにドイツ的だとしてWhitmanを祭りあげ，1904年には，*Die Dichtung*誌で，「Nietzscheが理解したものにWhitmanはみずからなっている。前者は憧がれる，だが後者は自分が憧がれるものにすでになっている。」とさらにWitman神格化をすすめて，Nietzscheの地位をかなり下げているのである。[3]

この経緯を要約するならば, Whitman の思想は Nietzsche を媒体としてドイツ人に紹介, 理解され, 毀誉相なかばしながら次第に独立した影響力をもつにいたったのであり, Nietzsche を呼び水にし得るだけの対照性を Whitman が示していたことは確かである。

しからば, どのように両者が類似し, どの点において相違するのかを, 一世紀近く閲した現時点と, アメリカ大陸でもヨーロッパ大陸でもない地点とから, 回顧的に展望して, 再検討することにも意義があろうかと思われる。

このことを行なうにあたって, 素材として *Whitman* の *Passage to India* を採りあげて, おもに Nietzsche の *Also Sprach Zarathustra* (1883) と対照させることを試みた。勿論この2作品の周辺にある作品を欠くことはできないのであるが, とくに Whitman のこの作品を採りあげた理由は, かれの「進歩」に対する態度がこの作品にもっともよく現われていることである。

3. *Passage to India* の先駆者

Passage to India を Whitman 自身がいかに評価していたかは, 1876 年版 *Leaves of Grass* の序文にあるつぎの一文で明らかである。

> Then probably "*Passage to India*" and its cluster, are but freer vent and fuller expression to what, from first, and so on throughout, more or less lurks in my writings, underneath every page, every line, everywhere...[4]

上の引用によって, この詩が彼の思想を総括し得るものと見て本小論の素材としたのであるが, たしかに Whitman の述懐のごとく, この詩の先駆者的な性格をもつ作品が幾つか見られ, また, この詩の反歌の意味が見られる詩も幾つか見られる。

先駆者的な詩の代表的なものは, 1860 年の *A Broadway Pageant* と見られよう。かれは Broadway で日本の使節団を迎える群衆のなかにあって, 東洋とアメリカの結縁のうちに, 世界がついにひとつの円環になったと感じ, 人類の始源から西へ西

へと進んだ人間が東より来た人間，すなわち人類始源の地より来たった人間とついに相合したと感ずる。Whitman のことばを借りるならば，

at last the Orient comes.[5]

Today our Antipodes comes,[6]

The Originatress comes,[7]

The race of Brahma comes.[8]

のように，東洋古代世界の来航であり，その行列には，最古の時代から東洋に属するものがすべて加わって歩んでいると感じられるのである。この行列は，

……the orb is enclosed,
The ring is circled, the journey is done,[9]

と Whitman が歌うように，世界の円環の完成を意味する。これらの各行に見られる Whitman の感慨は，*Passage to India* に流れるものと殆ど overlap するものであり，*Leaves of Grass*, Comprehensive Reader's Edition の編者が，この詩の脚注で，"*A Broadway Pageant* is a precursor of *Passage to India*."[10] と述べているのは肯綮に当るのである。

もうひとつの precursor は，同じ 1860 年の作で，*Enfans d'Adam*（アダムの子等）詩群の第 10 詩，*Facing West from California's Shores* である。この詩も，往古にアジアから発した人類が西へ西へと旅して，California の岸辺に至り，遙かに西の海の彼方の人類始源の地を憧憬し，世界の円環の完成に熱望する心情を歌っている。

また同じ 1860 年に彼は，*With Antecedent*（先在したものとともに）という詩で，先在したもろもろと契合する（tally all antecedents）[11] ことによって，自己の存在の必然が確かめられ，自己の完全性のただなかに立つ，このとき人間ら始めなく終

りなき時間のただなかに立つ(We stand amid time beginningless and endless,)[12] のであり，また善悪のただなかに立つ (we stand amid evil and good,)[13] のであると歌う。この詩に歌われる思想と Nietzsche のそれとの類似性はきわ立っている。これが歌われたのは Nietzsche が永遠回帰の思想を得た時に先立つこと，約 20 年である。

これらの 3 作品が同じ 1860 年に出ていることは，この年の前後が思索する者としての Whitman がひとつの acme にあったことを示唆するが，このあと約 4 年にわたる南北戦争及び Lincoln の死の悲しみの期間をへたのち，再びこの思想を歌うための契機を迎えるのである。

4．*Passage to India* の契機

Whitman が *Leaves of Grass* 初版を出した 1855 年から *Passage to India* を出した 1871 年までの約 15 年は，いわゆる「進歩の時代」の最高頂にあった時代と考えられる。1851 年の London 万国博に口火を切った進歩の競争は，勿論 18 世紀の推力のもとにあり，啓蒙思潮に遡るものではあったが，1856 年の鋼鉄の量産方法の開発によって格段の加速を示し，また次第に帆船の地位を奪っていった汽船の進出によって，交通・通信におけるつぎの三大事業が相次いで果たされ，世界が一挙に狭まったのが，この 15 年間であった。

すなわち，その 1 は 1866 年の大西洋海底電線の布設であり，その 2 は 1869 年の Suez Canal の開通であり，その 3 は同じ年のアメリカにおける Union Pacific Railroad と Central Pacific Railroad との連絡による大陸横断鉄道の完成である。この 3 事業を連結してみると，India (Suez Canal) Europe (Submarine Cable) Eastern Coast of America (transcontinental railroad) Western Coast of America となり，India から西へ西へと太平洋岸までの passage が短縮され，このあと India までの航路が補なわれると世界の円環が完成する。この航路はすでに 11 年前に日本使節団が越えてきた航路であったが，人類の西方への志向を引き継いでアメリカ西海岸からその旅をつづけ，円環の完成を目前にしている「現在」の時点に立って Whitman のこの詩が始まるであろう。

5．空間的円環から時間的円環へ —— Nietzsche の永遠回帰の思想との接点

前章の三大事業は世界の空間的円環の完成への人類の発祥以来の営為の延長上にあると見えるのであるが，Whitman の眼には，それらは歴史の光の届かない闇の彼方の過去への回帰であるとも映ずる。「現在」を歌うことは同時に「過去」を歌うことでなければならない，この主張からこの詩が始まっていく。その「過去」は，時間的形象と空間的形象が融合され，

> The Past……the dark unfathomed retrospect !
> The teeming gulf……the sleepers and the shadow !
> The Past……the infinite greatness of the past !(14)

と歌われるが，それは同時に India の地を metaphor としている。この地は，

> But myths and fables of eld, Asia's, Africa's fables,
> The far-darting beams of the spirit, the unloos'd dreams,
> The deep diving bibles and legends,
> The daring plots of the poets, the elder religions ;(15)

と歌われる奔放な夢に似た古代精神の世界でもある。こうしてこの詩は，19 世紀の物質文明の進歩への讃仰 —— その空間性 —— を歌うことから脱して，世界の円環の完成へとひたすら歩む，そしてその始源の地に立ち帰ったときに或る完成を示す人間の魂を歌う spiritualism への道を歩み始める。この India への帰還が果たされたとき，空間と時間と魂とが三位一体となる。

> Trinitas divine shall be gloriously accomplished and compacted
> by the true son of God, the poet,(16)

にある〈三位一体〉はキリスト教の用語を借りてはいるが，それと同一視できず，

むしろこの一行前の,

The whole earth, this cold impassive, voiceless earth, shall be
completely justifiied,[17]

にある大地の完全な肯定と表裏一体をなすものである。またこの境地を語るものが, the true son of God, the poet であるとの Whitman の主張は, 最奥の秘密を語ろうとするときの Nietzsche が詩と aphorism とによらなければならなかった事実を想起させるものがある。

「インドへの航路」は現在の人間の始源的人間への回帰であることを意味し, 先在するものとの契合のプロセスであることは, つぎの章句にも暗示されている。

Passage to India !
Cooling airs from Caucasus far, soothing cradle of man,
The river Euphrates flowing, the past lit again.

Lo, soul, the retrospect forward,
The old, most populous, wealthiest of earth's lands,
The streams of the Indus and the Ganges and their many
affluents,
(In my shores of America walking today behold, resuming
all,)[18]

(下線は筆者による)

あるいは,

Passage indeed O soul to primal thought,
Not lands and seas alone, thy own clear freshness,
The young maturity of brood and bloom,
To realms of budding bibles.

O soul, repressless, I with thee and thou with me,
Thy circumnavigation of the world begin,
Of man, the voyage of his mind's return,
To reason's early paradise,
Back, back to wisdom's birth, to innocent intuitions,
Again with fair creation.(19)

（下線は筆者による）

この「過去」への渡航が，善悪を超えたinnocent insuitionへの回帰であるとするならば，このIndiaの地はそのような赤児の心をもった人間（ur-menと呼ぶことができよう）の地であり，ur-worldと呼ぶことができよう。このur-worldと契合するとき，現実の世界は仮象の世界でなくなり，この世界の「進歩」が仮象のものでなくなる。ここまで考察を進めると，この詩が「進歩の讃歌」の形をとりながら，現実の世界の進歩が，この条件を充たさない限り手放しで讃えることができないという暗示を含んでいることに気づくのである。Whitman流の〈反時代的考察〉が展開されるといってよいのである。

さらにこの「過去」への渡航は，未来へと進む筈の時間が結局過去へ収斂する，換言すれば再び帰ってゆく，一種の円環的時間論を暗示する。引用（18）にあるように，the past lit again（過去が再び光に浮かび出た）のである。しかもその現在は過去から投射されたものであるとWhitmanは他の個所で歌っている。

この時間の円環性は，すでにキリスト教の時間論とは相違している。最後の審判の時に至るまで死者は生前の罪と信仰のまま再び生に帰ることなく，時は直進し一回性のものと見なければならない，それ故生あるあいだの悲しみや義により受ける不遇は，死後の世界で神の裁きにより償われる，このような思想とまったく次元を異にした思想を，Whitmanはそのたぐいまれな直覚性をもって体得しているかに思われるのである。これは，ふたたび*With Antecedent*を引用するならば，

I know that the past was great and the future will be great,
And I know that both curiously conjoint in the present time,(20)

によって証せられるものであり，またさらに遡って *Song of Myself* の各所に現われ，とくに，

(No doubt I have died myself ten thousand times before.)[21]

の1行に凝結しているものである。

このように，現在の瞬間に回帰する過去を身内に感じ，先在するものと契合するとき，引用（17）にあるような現実の完全な肯定 —— 大地が justify される —— が行なわれるという思想と，Nietzsche の「永遠回帰（eternal recurrence)」によって自己の生を完全に肯定する思想とのあいだに，或る親近性が認められよう。とくに Zarathustra に鷲と蛇とが呼びかけるつぎのことば，

> Behold, we know what you teach ; that all things recur eternally, and we ourselves too ; and that <u>we have already existed an eternal number of times,</u> and all things with us . . .[22]
>
> （下線は筆者による）

は，その表現においても引用（21）とよい対照となっている。

しかしこの親近性を認める反面において，Whitman と Nietzsche とのあいだに，この永遠回帰の思想をめぐって，いくつかの相違点が指摘できる。

その第1点は，この思想に到達するまでの内面的葛藤の有無にあろう。

Zarathustra はひとりの dwarf（重圧の精神）と語り合う。かれは dwarf にひとつの扉を示して，この1点でふたつの相矛盾する永遠（永遠の過去と永遠の未来）が相会うと言う。その扉には「現在の瞬間」と名札が掲げられている。(The name of the gateway is inscribed above : 'Moment'.)[23]かれは dwarf に，"do you believe, dwarf, that these paths contradict each other eternally?"[23]と訊ねると，dwarf は，"All that is straight lies,. . . All truth is crooked ; time itself is a circle."[23]と答える。Zarathustra は憤然として，"do not make things too easy for yourself! Or I shall

let you crouch where you are crouching, lamefoot ; and it was I that carried you to this height."[23]と罵る。単に論理的な仮説として時間の円環性を語ることは，人間の高揚・飛翔にとって無意味で楽天的に過ぎるものであり，人間とともに高みに登ってきた知性（dwarf かつ重圧の精神）もついに人間の卑小を救うものではなく，人間の高揚についてゆくものでしかないと悟るのである。

この永遠回帰の環がまったく Zarathustra のものになりきるためには，死と再生（恢復期と表現されている）の儀式とも言うべき劇的状況が必要であった。

> "Zarathustra, the godless, summons you! I, Zarathustra, the advocate of life, the advocate of suffering, the advocate of the circle ; I summon you, my most abysmal thought!"[24]

とみずからを「神を無みする者」「円環を弁護する者」と呼んだのち，死んだごとく打ち倒れ，そのまま７日を経たのち（この７日という数に，Nietzsche の parody 精神が現われているが），再び回復し，その回復を見て，従う生き物（鷲と蛇）が食物を捧げてつぎのように語る。

> "Has perhaps some new knowledge come to you, bitter and hard? Like leavened dough you have been lying ; your soul rose and swelled over all its rims."[25]

> "Sing and overflow, O Zarathustra ; cure your soul with new songs that you may bear your great destiny. For your animals know well, O Zarathustra, who you are and must become : behold, you are the teacher of the eternal recurrence that is your destiny!..." "Behold, we know what you teach ; that all things recur eternally, and we ourselves too ; and that we have already existed an eternal number of times, and all things with us..."[26]

Nitezsche のこの catastrophe 性を帯びた認識到達のくだりには，かれ流の opera 性が認められとしても，このような catastrophe を経なければならないほどに「永遠回帰」の悟りは認識の壮絶な飛躍であったと言える。

翻って whitman にはその思想形成の過程において，Zarathustra に見られる catastrophe または crisis が見られるかどうかについては，Jan Christian Smuts がその著書 *Walt Whitman : A Study in the Evolution of Personality* において語るつぎの文が核心を衝いていると思われる。

> The absence of a crisis, of a violent transition or mental change, during this important period of life, and indeed all periods of his life, is most significant both in regard to the light it throws on the nature of his personality and in regard to the far-reaching influence it exercised in moulding his opinions... A harmonious nature knows no crisis. Goethe had no crisis ; it may be confidently asserted that Shakespeare had none ; it is certain that Whitman had none.(27)

とすれば，Nietzsche のそれが revolution と見てよく，これに対する Whitman のそれは evolution と考えられるのである。

第2の相違点は，さきの引用 (25) (26) ですでに見られるように，Zarathustra が「永遠回帰」の悟りを得たのちも，その思想を間接的に鷲と蛇とをして語らしめる話法と，つねに一人称 I をもって自己の全思想を語る Whitman 話法との違いである。Whitman もその詩において opera 的手法を用いる点で Nietzsche に似ているが，かれは仮面を用いずに舞台の中央で（この舞台は屋内ではなく広い空の下のアメリカが一望できる高い舞台である）ひとり朗々と歌う opera 歌手であるが，Nietzsche は登場人物の殆んどが自分の一部であるにも拘わらず，鷲と蛇とか色々な仮面をもって演じさせる。その最たるものが Zarathustra という仮面である。この1人称で歌う直接性と自然性に対するに，仮面の登場者に歌い語らせる間接性は，近いところにいるはずの両者を遠い距離にあるかのような感を抱かせるのである

が，この両者のあいだの遠近感は，じつは可成り根深いものがあるうえに，その時々に流動することを特記しておきたい，「遠くて近く，近くて遠い」と言う表現がふさわしく感じられる。このこと自体両者のもつ「生」の偉大さである，と言うことに結局は尽きるのかも知れないが。

6．Columbus Obsession

Whitman にも Nietzche にも共通して obsess している人物に Columbusがある。ある意味で，*Passage to India* はこの人物が主人公であり，舞台廻しでもある。India が発して西へ西へと彷徨し再び India に帰還の旅に向かう人類像に，Europe から西へ India に達する冒険的（現代のわれわれの想像を絶する冒険的）な航海に向かった Columbus が，その象徴性をもって二重写しになるのは，けだし当然と言えよう。また Whitman が人跡未踏の境地を歌うとき，みずからを Columbus に擬する心境もまた当然と考えられる。まして Whitman がもっとも愛し歌ったアメリカは，不幸にしてその名を冠するに至らなかったとはいえ，Columbus の地であり，その到達したあたりから人類は西へ西へと歩み，西岸に達したのである。（その間の American Indian との相克を，親和の相のなかに包み隠している点は一応留保するとして。）

Whitman は *Passage to India* のなかで Columbus につぎのように呼びかける。

> (Ah Genoese thy dream! thy dream!
> Centuries after thou art laid in thy grave,
> The shores thou foundest verifies thy dream.)[28]

たしかに Columbus は新大陸を発見したが，「西へ西へ航海すれば India に達する」ことを証明するのは夢に終り，未完のまま Passage to India が残されていたのであり，詩 *Passage to India* は Columbus の志の延長上にあるのである。

また Whitman は，Columbus を，ひとりの冒険的航海者としてばかりでなく，中世のヨーロッパ閉鎖社会を終らせ，人類をその内部から膨張させる energy の象徴として見る。

The mediaeval navigators rise before me,
The world of 1492, with its awaken'd enterprise,
Something swelling in humanity now like the sap of the
earth in spring,
The sunset splendor of chivalry declining.[29]

またかれは Columbus を 1 個の人間として，その絶頂と深淵とを歌う。

As the chief histrion,
Down to the footlights walks in some great scena,
Dominating the rest I see the Admiral himself,
(History's type of courage, action, faith,)
Behold him sail from Palos leading his little fleet,
His voyage behold, his return, his great fame,
His misfortunes, calumniators, behold him a prisoner, chain'd,
Behold his dejection, poverty, death.[30]

Whitman 自身母かたの祖先に船乗りを何人か持ち，その体験をみずからの体験と思い込むほどに幼時から親しみ，自分をひとりの舟人に擬して育ってきて，Columbus の Image のなかに自分を同化させるのは，さ程難かしいことではなかったと思われる。現に，この詩のあと数年経ないで，自身が卒中のために身体の自由を失ない，また最も自分を愛し理解していた母 Louisa Van Velsor がこの世を去って，かれの人生で Lincoln の死に匹敵する失意をを味わったとき，まず自分の失意を晩年の Columbus に託して歌い，それでもなお世界の円環完成のうちに見出される理想の境地の現出を神の意志と感じて希望を失なわない自分を歌った *Prayer of Columbus* は，かれの Columbus との同化をよく物語っているのである。ただこの Columbus は，すでに歴史上の Columbus から Whitman の魂の西方への航海者 Columbus すなわち Whitman 自身の魂をそなえた人物となっている点を付記しなければならない。

いっぽう，Nietzsche も自己のうちにこの船乗りを住まわせていた。かれの作品のなかに Columbus が屢々現われ，自分を Columbus に擬している場面も見られる。とくに 1882 年の早春に帆船に乗って Genoa から Sicily 島に渡った船旅と，このあと数ヶ月は，かれが詩人としていくつかの秀作を残したほどに，晴れ渡った静かな心象風景の日日であったが，その作品のなかに Columbus に託したものが 2 篇ある。そのひとつは「新らしい海に（*Nach neuen Meeren*）」である。

Nach neuen Meeren

Dorthin—will ich : und ich traue
Mir fortan und meinem Griff.
Offen liegt das Meer, ins Blaue
Treibt mein Genueser Schiff.

Alles glanzt mir neu und neuer,
Mittag schlaft auf Raun und Zeit—:
Nur dein Auge—ungeheuer
Blickt mich's an, Unendlichkeit.(31)

かなたへ——ぼくは意図する，
ゆくすえをたのむは，ぼくとこの腕。
海はひろびろとひらけ，その濃青へ，
ぼくのジェノヴァの船はのり出す。

すべてが——新らしく，まあたらしく輝く，
まひるがまどろむ，時間と空間に。
無限のすがた——だゞ君の眼だけ，
ぼくをむきみに見つめている。

この前年，Sils-Maria（この地名と Nietzsche とは切り離せない）で永遠回帰の思想に襲われ，無の絶対境を体験したかれは，この詩の第 2 stanza にそのすべてを結晶させている。Nietzsche にとり「新らしい海」は偉大な正午の世界であり，この世界に到達するべく船出するためは，Christianity の旧世界を破壊しつくして再び帰る陸地のない船出としなければならない。この詩の明るさは，この船旅の危険と悲愴感を秘めた明るさなのである。もう一篇はもっと直裁にこの船旅の冒険性を語っているのである。

新らしいコロンブス

女の友よ —— コロンブスは言った ——
もうジェノヴァの男を信じるな！
いつもあの男は海の青を見つめている ——
遠い果てが無性に誘うのだ！

未知のものが，いまのわたしに尊とい！
ジェノヴァは —— とうに沈んで消えた！
心よ，冷静に！　手よ，舵を握れ！
眼の前に大海 —— だが陸は？ —— だが陸は？

しっかり脚を据えろ！
断じてあとに引けない
向こうを見ろ —— 遠くからわれわれに呼びかけている
死が，名声が，幸運が。(32)

この Nietzsche-Columbus の船が陸地を見出し得ないときは，「虚無」の海に没し去るほかない。〈断じてあとに引けない〉のである。Nietzsche-Columbus にとっての「海」は，〈まひるが時間と空間にまどろんでいる〉新らしい海に到達し得るか，荒涼たる虚無に没し去るかの，決定的な賭けの場であり，かれはやっと Genoa の港を

出たばかりなので，新大陸発見者のColumbusではないのである。(歴史的にはPalosの港と言うべきであるが，1880年冬から1882年春までのNietzscheが殆んどGenoaの住人であった。勿論ColumbusがGenoaの人であったことは当然意識されている。)従って，確信のなかに限りない不安と苦悩が入り混じったきわめて不安定なNietzscheの心情そのものがここに現われる。このときColumbusはもはや実在のColumbusをはなれてNietzsche自身に化する。Nietzscheの仮面のひとつになるのである。さきに指摘した出港地がPalosでなくGenoaであることは，Nietzscheにとって必然的な置き換えである。なぜならGenoaこそColumbusの故郷なのであり，〈とうに沈んで消えた〉Genoaは，Nietzscheにとっての故郷――自分が生まれ育ったキリスト教的風土――と同じ意味をもち，そこからみずから進んでup-rootされた自分の現況は，船隊が集まり出港した土地だけの意味しかないPalosを離れたのとはまったく異るのである。このように，Columbusを完全にNietzsche化し，その人物に自分の思想を語らせる手法は，かれのSocrates, Plato, Wagnerなどを扱かう手法と共通するものがある。

ColumbusのNietzsche化のもうひとつの現われは，さきに挙げた2篇の詩において見られるColumbusの孤独性である。〈ゆくすえをたのむのは，ぼくとこの腕〉〈ぼくのジェッノヴァの船〉〈手よ，舵を握れ！〉〈しっかり脚を据えろ！〉などのことばは，すべて自分のみに向けられ，自分が指揮者でありその号令を受けるべきshipmatesあるいはsailorsがいることについての意識がきわめて薄いことが指摘される。3隻の船と90人の乗組員は，NietzscheのColumbusの意識からは消え去っているのである。孤独な漂泊者Nietzscheがここにも影を落している。WhitmanのColumbusがつねにAdmiralであり，老年の失意にあるColumbusにはじめて孤独のイメージを持たせているのとは，まったく対照的である。Whitmanはあくまでも対象に同化してゆくのであり，対象をWhitman化しない。Columbus像もその歴史性の軌道を外すことなく，Whitmanがそのなかに入り込んでくるに委ねるのであり，この親和力がWhitmanの特性といえよう。

さらにNietzscheのColumbusは，船出するにあたり，背後の橋という橋をすべて焼き払い，背後の大陸をことごとく破壊し尽くすことがどうしても必要であった。「神」をその中心に据えた古い価値体系を破壊し尽くすことが，新らしい海に船出

する必要条件であったといえよう。こうしてNietzscheのColumbusは，実在のColumbusとはまったく異なる，Nietzscheのみの Columbusでなければならなず，つねにneuenとかneuの形容詞を必要とする象徴的人物となるのである。

WhitmanのColumbusは，あくまでも未完の航海者である実在のColumbusの精神を継承して，ヨーロッパの旧大陸から遙かに西のアメリカ西海岸から，さらに西へと旅する魂の航海者である。船出する背後の地は，アメリカという新らしい価値体系を生み出しつつある土地であり，焼き払うべきものはまだ多くはない，あるとすればそれはすべて旧大陸から渡ってきて新らしい土地によく根付いていない旧い価値体系だけである。Whitmanより見て，それらはこの大地のエネルギーのなかに吸収されそうにも思えたと思われる。(この楽観性は，1874年以後次第に挫折感に変ってくるが)すくなくとも *Passage to India* を書いた時のWhitmanにはそう見えたに違いない。この詩の前半のPassage to Indiaにも後半のPassage to More Than Indiaでも，この破壊性（Nietzscheの示した）は認められないといってよい。

かくの如く，両者とも同じくColumbusにobsessされていながら，また目的とする新らしい海に関して相当の親近性があると見えながら，そのColumbus像に大きなへだたりがあるのは，両者が対象を扱う手法の相異によることもあるが，より根源的には，両者が船出する土地の精神状況の違いによるものであると考えるべきであろう。

7．Passage to more than Indiaと全人への道

Whitmanにとって，Indiaへの旅は，人類がur-worldへ帰る，換言すれば幼児のごとく善悪を超えた無心の直覚性に帰還する旅であった。しかしこの旅は，この詩の導入部にあるごとく，物質的な世界の進歩とoverlapしたimageを持たせることは否定できない。また彼にとって，この過去と契合する境地が人類の最終かつ境地とは考えられなかったように推察される。1860年ごろの彼の作品と *Passage to Indid* とでは，このあたりから離れてゆき，人類が過去の先在するものと契合した後の未来像へと進んでゆく。

この詩のCanto 7以後のPassage to more than Indiaは，Indiaに到達したときの

境地を出発点として，神の世界に向かう人類の spiritual voyage を歌う。この世界は，名づけるならば，über (over)-world といえるであろう。そしてこの世界の旅の行きつく先は über (over)-man の境(きょう)であるといえる。(このように，人類は一旦 infancy に帰還してから，この Passage to more than India に旅立たなければならないという思想は，Nietzsche が超人に達する process として，駱駝から獅子へ，獅子から赤児へと，赤児の境地を超人への最終 step とした思想とは，相当な類似性が認められるのである。) この 60 年代と 70 年代とのあいだの Whitman の思想の違い (spirituality の濃さに於て最も歴然としている) は，おそらく，南北戦争の間に看護人として見てきた数多くの死と，Lincoln の死とを通じて，Whitman が死の意味を歌うことが生の意味を歌うことと窮極的には同じことであり，詩人としての最高の使命をここに見出したことを示していると思われる。つぎの詩は，この Whitman の決意を表わしている。

> The voyage of the soul—not life alone,
> Death, many deaths I'll sing.[33]

さて，India 以上のものへの航海は，人間がいまだ船を乗り入れたことがない trackless sea の航海であり，生きながらそこへは到達し得なかった人骨の散乱している岸辺への航海である。この「生きながらは到達しなかった人骨」の metaphor は，*Zarathustra* に現われる dwarf (重圧の精神) を思わせるものであり，謂うなれば，生きているときにのみ働き得る，そして遂に最高知には到達し得ない，人間の intellectuality と解すべきであろう。

> Passage to you, your shores, ye aged fierce enigmas!
> Passage to you, to mastership of you, ye strangling problems!
> You, strew'd with the wrecks of skeletons, that, living, never rach'd you.[34]

(下線は筆者による)

この船路は，もはや地上の船路ではなく，生死の境界を超越した霊的人間の船路であり，地球の円環を脱して evolve してゆく軌道を辿る。従って「海」の metaphor を用いていながら，飛翔を想わせることばが各所に混在する。航海と飛翔とが無意識に混在するのが，Passage to more than India 部の特色であることは，つぎの引用（35）から（38）までよく現われている。

Bear me indeed as through the regions infinite,
Whose air I breathe, whose ripples hear, lave me all over,
Bathe me O God in thee, mounting to thee,
I and my soul to range in range of thee.(35)

Thou pulse—thou motive of the stars, suns, systems,
That, circling, move in order, safe, harmonious,
Athwart the shapeless vastnesses of space,
How should I think, how breathe a single breath, how speak, if,
I could not launch, to thee, superior universes?(36)

Passage to more than India!
Are thy wings plumed indeed for such far flights?(37)

O sun and moon and all you stars! Sirius and Jupiter!
Passge to you!(38)

（下線は筆者による）

とくに引用（37）は明白に飛翔を示している。これを Whitman の矛盾撞着と解してはならないと思われる。むしろ，この詩の前半 Passage to India 部における「進歩」が，運河の開通，海底電線の布設とも「汽船」の進歩ともにあったことを知りながら，たとえば引用（41）に示されているように，Whitman の航海は，「帆船」の航海から一歩も出ていないことと，大きな関連があると見

たほうが確かであろう。このあと Whitman が書いた 3 篇の船出と死の metaphorical な詩, *Joy! Shipmate, Joy! ; Now Finale to the Shore ; Sail Out, my Eidôlon Yacht* がすべて帆船の船出であることとも関連があり, Whitman が幼時から青年期にかけえ経験した帆船とくに Clipper と呼ばれる快速航洋帆船の時代と, Long Island と Manhattan と Brooklyn の波止場の記憶が, いかにかれ自身となっていたかを証するものであるとともに, この「帆船」の image がまず帆から与えられるもので,「汽船」の image が船体から与えられるのとまったく異なるのだという認識から始めなければならないことを教える。帆のはたらきと image は, kite (たこ) のそれであり, プロペラ機の翼のそれであり, グライダーの翼のそれであり, 本来飛翔の image をそなえている。従って「帆船」は, 飛翔と航海の image を結び合わせた微妙な接点的存在なのである。見方によれば,「汽船」は海と空との断裂をもたらし, 海だけのものになったといえよう。「帆船」は海と空の両者の領域に属するものといえる。そして Whitman は幼時からこの帆船と同化していたことが, *There Was a Boy Went Forth* などの詩から容易にうかがわれることである。

このようにして, Whitman の航海は, 帆船の image を生かし, 次第に高く飛翔して神の領域へと達してゆく evolutional な軌道を進むことになるのであるが, Nietzsche の人間神 (超人) への途はどのようなものであろうか。

Nietzsche は永遠回帰帰の思想を Zarathustra の口を借りて, つぎのように語る。

I myself belong to the causes of the eternal recurrence. I come again, with this sun, with this earth, with this eagle, with this serpent---not to a new life or a better life or a similar life: I come back eternally to this same, selfsame life, in what is

greatest as in what is smallest, to speak again the word of the great noon of earth and men, to proclaim the overman again to men.[39]

(下線は筆者による)

このparagraph は有名なことばであるが，この部分だけを読むことは誤解の危険が大きい。まったく同一の生に回帰することが一見 evolution を否定しているかに思われるのであるが，同一の生に回帰するがゆえに，より高い人間として回帰するためには，生あるうちに自己の生を大いなる肯定のうちに精一杯生きなければならないのである。その高まりが回帰るであろう生の始めの高みである。この永却の回帰の末に人間の最高頂に達するのである。水に比喩をとれば，堰で止められた水は次第に高まってゆく，それを上流のある点で堰とめれば前よりも高い水位から始まるのである。この思想が Nietzsche を襲ったのが，人と時とを距たる 6,000 フィートの Silvaplana 湖畔であったことは意味が深いことである。

さきに挙げた「同一の生に回帰する」このことばが，現実の生を肯定し，太陽と大地とを肯定して全力を尽くして積極的に生きることが，自己の生の evolution の契機であり，超人への途であることの逆説的表現と見るとき，Nietzsche がかれ流の evolution の思想の持ち主であると結論づけることができる。

それにしては，Whitman の evolution と Nietzsche のそれとは，かなり違う image を与えることは疑いを容れない。この違いは，前章の Columbus の違いと結論的には一致しそうである。すなわち，Whitman のインド以上のものへの航海は，暗黙の批判を含みながらも，アメリカのみならず世界の，端的に言えば人類の，進歩の港から，その propelling energy をうけて始まるのに対し，Nietzsche のそれは，背後の大陸を破壊し尽くして始められなければならず，つねにその破壊性のうえに evolution の営なみがあることによる。このもっとも象徴的なことが，「神を殺す」ことであった。このあと頼りになるのは，引用 (31) にあるように，〈ゆくすえをたのむは，ぼくとこの腕〉だけというこの悲愴さが，*Zarathustra* に流れる，苦悩の深みから出る哄笑の形をとらせるのである。

これに反して，Whitman の船出は，勇気と楽しげな期待の響きを持っている。

O we can wait no longer,
We too take ship O soul,
Joyous we too launch out on trackless seas,
Fearless for unknown shores on waves of ecstasy to sail,
Amid the wafting winds, (thou pressing me to thee, I thee to me
O soul,)
Caroling free, singing our song of God,
Chanting our chant of pleasant exploration.(40)

Passage, immediate passage! the blood burns in my veins!
Away O soul! hoist instantly the anchor!
Cut the hawsers—haul out—shake every sail!
Have we not stood here like trees in the ground long enough?
Have we grovel'd long enough, eating and drinking like mere
brutes?
Have we not darken'd and dazed ourselves with books long
enough?(41)

上記引用の各所に，出航する帆船の，勇気と期待に満ちた感情の高揚をうかがわせる語句や表現が見られる。しかし，この航海が再びこの岸辺に帰りつくことのない旅であることが，とくに引用(41)の Cut the hawsers の表現で示されている。「ともづなを切る」のは再び帰らぬ決意のもとでしかなされないことである。いま船出しようとする海の危険ではかり知れない海路であることは Whitman がよく知っていることなので，つぎの２行にこれを結露させているのである。

For we are bound where mariner has not yet dared to go,
And we will risk the ship, ourselves and all.(42)

しかし，この危険を承知したうえで，なおかれは自分の船の安全を確信するとこ

ろに，Whitman の独得の楽天性をうかがうことができるのが，つぎの一行であり，本詩の key tone となるものである。

> O daring joy, but safe! are they not all the seas of God?(43)

Columbus に obsess された Nietzsche も，Zarathustra のなかで，超人への途を，航海の metaphor をもって語る場面を多くもっている。この Nietzsche-Columbus の海は，その船出が大いなる破壊ののちに始まったために，波荒く吠え狂う海の image をもち，新らしい地への憧憬を高らかに唱えて沈黙させなければならない。かれの海は Whitman の海とは異なり，あくまでも積極的に自力で海路を開かなければならない。しかも荒れ狂う浪の音を（かれの思想に対するヨーロッパ世界の反撥を），声高らかに叫ぶ声によって静めなければならないのである。

> The sea is raging ; everything is in the sea. Well then, old sea-dogs! What of fatherland? Our helm steers us toward our children's land! Out there, stormier than the sea, storms our great longing! (44)　　（下線は筆者による）

「父祖の地は何ぞ」と船上にあってもなお旧い大陸を振り切る努力をし，理想の地を歌って波音を静める（超克する）この表現から感じられるのは，Whitman の新らしい世界への讃歌のもつ spontaneity と対照的な，necesssity である。あらゆる価値を転換してあたらしい土地にあたらしい価値をうち立てようとして，Nietzsche が「虚無」に没し去らないために，まず自分に自己超克を求める心境であろうか，つぎの paragraph には，この命令的な響きが，当為的な響きが聞こえる。

> O my brotheres, your nobility should not. look backward but ahead! Exiles shall you be from all father and forefather lands! Your children's land shall you love : this love shall be your new nobility—the undiscovered land in the most distant seas. For that I bid your sails search and search.(45)

これに対して，Whitman には，浪のひびきさえ，喜びの ecstasy をもたらす感をわれわれに与えるのである。引用（40）の，on waves of ecstasy(歓喜恍惚の波に乗って)の1句のなかに，かれの幼時からの「海」のよろこびが投影されているのを感じ取るのである。

8．海の詩人として

1876年，病気のため Basel 大学を1年間休職して，Genoa－Naples－Sorrent と転地療養のため地中海岸を旅し，海とはじめて対面した Nietzsche は，1879年に同大学を正式に辞職し，このあと約10年間を漂泊者として送ることになる。しかし，かれがみずから「漂泊者」と呼んだのは，単に居所を転々とした者の意ではないらしい。この意味では，動きが激しい印象の割には，その軌跡は大きくないのである。この点では，Whitmon がみずからを「loafer」と呼んだのと，あまり違わない事情にある。Whitmon が歌ったアメリカの大地の広さ，インドへの旅の遠さなどに比べて，かれはアメリカ東部，New York を中心とする地域を離れたことは数えるだけしかないのである。西海岸すら実は足跡を印していないのである。ふたりが自分を「漂泊者」「放浪者」と呼んだのは，現実よりも次元の別なところに理由がありそうである。

Nietzsche の 1879～1900 の動きを年譜から略記すると次表のようになる。

1879　Sils－Maria（Silaplana 湖）

1880　春 Venice　冬 Genoa

1881　春 Genoa　夏 Sils－Maria　冬 Genod

1882　春 Genoa→Sicily　秋→冬 Genoa（Rapallo）

1883　春 Genoa　夏 Sils－Maria　冬 Nice

1884　春 Venice　夏 Sils－Maria　冬 Nice

1885　春 Nice　夏 Sils－Maria　冬 Nice

1886　Nice から Venice そして Naumburg

　　夏 Sils－Maria　秋 Genoa　冬 Nice

1887　夏 Sils－Maria　冬 Nice

1888　春 Torino　夏 Sils－Maria　秋→冬 Torino

1889　1月 Torino で発狂→バーゼル→イエナ

1890　Naumburg の母の許へ

1897　母の死によりヴァイマールの妹の許へ

1900　死　去

一覧して，Switzerland の Sils－Maria と Rapallo－Genoa 地帯と，Nice と Venice と，この4ヶ所が浮きあがってくる。この4ヶ所を中心とした往復と，この間の旅行に集約される。これらにはそれぞれ Nietzsche の哲人・詩人としての歴史が刻みこまれている。Nietzsche の残したものから辿ってみよう。

Sils-Maria（*Zarathustra* と出会う）

Here I sat, waiting – not for anything –
Beyond Good and Evil, fancying

Now light, now shadow, all a game,
All lake, all noon, all time without all aim.

Then, suddenly, friend, one turned into two –
And Zarathustra walked into my view.[46]

Rapallo（Zarathustra 第1部の成立）

The following winter I stayed in that charming quiet bay of Rapallo which, not far from Genoa, is cut out between Chiavari and the foothills of Portofino. My health could have been better ; the winter was cold and excessively rainy ; my small

albergo, situated right at the sea so that the high sea made it impossible to sleep at night, was in just about every way the opposite of what one might wish for. In spite of this and almost in order to prove my proposition that everything decisive comes into being "in spite of," it was that winter and under these unfavorable circumstances that my *Zarathustra* came into being... It was on these two walks that the whole of *Zarathustra I* occurred to me, and especially Zarathustra himself as a type : rather, he overtook me.(47)

Nice (Nizza)（創作活動の絶頂）

That summer, back home at the holy spot where the first lightning of the Zarathustra idea had flashed for me, I found Zarathustra II. Ten days sufficed ; in no case, neither for the first nor for the third and last, did I require more. The next winter, under halcyon sky of Nizza, which then shone into my life for the first time, I found Zarathustra III — and was finished. Scarcely a year for the whole of it.(48)

Venice (his promised land)

And when I say beyond the Alps, I really merely say Venice. When I seek another word for music, I always find only the word Venice. I do not know how to think of happiness, of the south, without shudders of timidity.(49)

上の引用にあるように，Nietzsche の生涯のもっとも豊沃な時期は，（ドイツ精神主義者が南方的デカダンスと批判するが）南方憧憬と Dionysus 追究の時代であるが，見方を変えると「海」との出会いの時代であった。唯一の例外は Sils－Maria であるが，ここにも Silvaplana の湖があり，また Nietzsche は，つぎのことばで，高

い山頂と深い次とを結びつける。

> Whence came the highest mountains? I once asked. Then I learned that they came out of the sea. The evidence is written in their rocks and in the walls of their peaks. It is out of the deepest depth that the highest must come to its height.(50)

高山の頂きの岩や壁面に海の痕跡を見て，最も高い山も太古の海であったことを知り，そしてつぎに，人間も最も高く登ることを志すならば，最も深い海底（苦悩）に沈まなければならないことを自らに認識させる，この文から彼の独得な比喩の才能が感じられる。

かくして，Switzerland の出岳地帯と地中海岸とは内的連関をもって Nietzsche の住むところとなるのであるが，かれの「海」との出会いが，ひとつは Columbus となって結実したことは既述のとおりであるとして，その他の面では，耳の人である筈の Nietzsche が，こと「海」に関してはきわめて視覚的であることが特筆される。あれ程眼が弱くかれの頭痛の原因となっていたことを考え合わせると，かれが海から得た慰めと啓示とは，それが彼をもっとも苦しめた眼にとってこよない慰めとなったことに由っているのではないかと推量させるものがある。引用（55）で，波音で夜眠れないにもかかわらず，この入江を，charming quiet bay と形容しているのは，矛盾ではなく，前者は聴覚的で，後者は視覚的表現なのであり，入江を見はるかす高台の散歩道で Zarathustra I の構想が完成したのも，視覚的な慰めと啓示によるところが大きかったので，Nietzsche が特記したのではないだろうか。

海の詩人として，Nietzsche が視覚的に海をとらえた個所には，とくに美的感覚と思想の深みとが結合した表現が多く見られる。数多くのなかから数例をとりあげで考察すると，つぎの paragraph は視覚そのものから超人の思想に飛躍する例とみてよい。

> Behold what fullness there is about us! And out of such overflow it is beautiful to look out upon distant seas. Once one

said God when one looked upon distant seas ; but now I have taught you to say ; overman.(51)

この文を書いた時期から判断して，この海の心象風景は Genoa の海岸と考えられよう。

つぎの文からは，Rhine の源近くの急流を凝視してその水の流れてゆく末を思った Basel 時代と，Silvaplana 湖畔で湖水を凝視した Sils-Maria 時代とが，混じ合い発酵したものが読み取れよう。

Mouth have I become through and through, and the roaring of a stream from towering cliffs : I want to plunge my speech down into the valleys. Let the river of my love plunge where there is no way! How could a river fail to find its way to the sea? Indeed, a lake is within me, solitary and self-sufficient ; but the river of my love carries it along, down to the sea.(52)

またつぎの文は，引用（58）と同じく人間精神の苦悩の深みと人間精神の高揚とが，太陽と海の metaphor を用いて，詩的に表現されている好例である。

Look there : How she approaches impatiently over the sea. Do you not feel the thirst and the hot breath of her love? She would suck at the sea and drink its depth into her thousand breasts. It wants to be kissed and sucked by the thirst of the sun ; it wants to become air and height and a footpath of light, and itself light. Verily, like the sun I love life and all deep seas. And this is what perceptive knowledge means to me : all that is deep shall rise up to my height.(53)

最後に，つぎの文の絵画的効果は，その視覚的美意識が，ついに Nietzsche の思想

性を抒情性のなかに没し去られるのではないかとさえ思わせるものであり，一読して，この美しい海の情景を呆然として見入る Nihtzsche の姿と，その鋭敏な感受性とが浮かびあがってくる感をすら抱かせる。

> From the sun I learned this ; when he goes down, over-rich; he pours gold into the sea out of inexhaustible riches, so that even the poorest fisherman still rows with golden oars. For this I once saw and I did not tire of my tears as I watched it.(54)

以上はごく1部であり，その他 *Zarathustra* に現われる「海」は数多いのであるが，そのすべてが，この書の破壊的な価値転換と否定のすさまじさを和らげ，視覚美と詩的流動性をもたらし，「生」のもつ神秘と豊沃とを暗示する。この 1881 年から 88 年までの稔り多かった漂泊の時代は，「海」との出会いによって開けたと言ってもあながち過言ではないのである。つぎの paragraph は，かれの海の心象のすべてと，永遠回帰の熱望とを合わせ歌った aria であるといえよう。

> If I am fond of the sea and all that is of the sea's kind, and fondest when it angrily contrddict me ; if that delight in searching which drives the sails toward the undiscovered is in me, if a seafarer's delight is in my delight ; if ever my jubilation cried, The coast has vanished, now the last chain has fallen from me ; the boundless roars around me, far out glisten space and time ; be of good cheer, old heart! Oh, how should I not lust after eternity and after the nuptial ring of rings, the ring of recurrence?(55)

このように，海から得るものが大きかった Nietzsche であったが，Whitman が抱いていた海との親和性には，ついに及ばないことを指摘しなければならない。

Paumanok (Long Island) に生まれ，揺籃のなかで，

The heaving sea, the waves upon the shore, the musical, strong waves.[56]

とともに育ち，波の rhythm を自分の脈膊と同じに感じるほど，海が身体のなかに，はいり込み，また母かたの祖先に多くの船乗りを持ち，*Old Salt Kossabone*[57] にあるような，海と船乗りとにかかわる神秘な物語りを傾聴し，Brooklyn や Manhattan で帆船の船出する姿に心を躍らせ，かつまた，*There Was a Child Went Forth* に歌われるように，あらゆる存在と同化する神秘的な親和力の持ち主であり，揺籃を出たばかりの幼な児として宇宙の秘鍵と生死の意味を海に教えられた Whitman は，その生涯を通じて「海の子」であった。かれの作品の多くは，波の音をその伴奏として読むべきものであり，静かな室内で読むことはその詩的効果を把握しがたいものである。再度 Jan Christian Smuts を引用するならば，

> The influence of the sea was undoubtedly one of the most important factors in the growth of his thought ; subtly and indelibly it coloured all his views in a quite remarkable degree, and was the direct source of some of the most eloquent and suggestive passages in *Leaves of Grass.*[58]

に尽きるといえよう。

このような Whitman の personality から，たとえば Tennyson の *Ulysses* に歌われるような，住み馴れた岸辺を去って再び帰ることなく西方の海に船を向ける seafarer の image が，ただちに自分の自画像になり，従って自分がただちに Columbus になり切ることができるのである。

Passage to India においては，未見の国への果てしない航海が，修辞上のことではなく，自分の内にある熱望の噴出として歌われている。自身が容易に seafarer になり切れる Whitman にとって，この危険な航海に船出しようとするとき，その期待と躍動を歌うのは，自然なことである。それほどに，彼の精神は，みずからを「loafer」と呼ぶにもかかわらず，海に深く根をおろして土着していると言える。狭い意味で

はドイツと，広い意味では Christendom と絶縁し，みずから up-root した Nietzsche のほうが，この意味では「漂泊者」と呼ぶのがふさわしいし，結局かれは海にも土着はできなかったのである。

人と時とを距たる 6,000 フィートの高みで湖の静寂と対して永遠回帰の思想に襲われた Nihtzsche は，Genoa の海辺で，ついで Nice の海岸で，その思想に肉付けしていったのであるが，ついに「海」の静と動とから「生」の豊かな意味をその窮極まで汲み取ることが出来なかったことは，「生」の象徴として Dionysus の神を神話から導き出さざるを得なかったことによっても窺うことができる。これに反して，Whitman の場合は，たとえば *As I Ebb'd with the Ocean of Life* において，

> As the ocean so mysterious rolls toward me closer and closer,
> I too but signify at the utmost a little wash'd-up drift,[59]

と歌い，また，

> I too Paumanok,
> I too have bubbled up, floated the measureless float, and been
> washed on your shores,
> I too am but a trail of drift and debris,
> I too leave little wrecks upon you, you fish-shaped island.[60]

と歌ったとき，自分を「生の大洋」から打ちあげられた 1 片として，いかにも卑小な否定的なものとして歌うように見えて，じつは絶え間なく ebb しては flow する宇宙の脈動に従って，この陸に「生の 1 片」を打ちあげては，再び大洋に回帰させる，永遠に繰り返す生の循環の相に従う自己を歌っているのである。この大いなる否定と大いなる肯定とを同時に成立させ，矛盾するものを同一化する海こそ，Whitman にとっては「生」そのものなのであり，Dionysus の神なのである。従って Whitman には，こと改めて Dionysus を探し出す必要がなかったのであり，つねにその神に抱かれて育ったといえるのである。

Ebb, ocean of life, (the flow will return,)[61]

と歌うとき，Whitman は，海の脈動のなかに永遠回帰の世界を感得しているのである。つぎの詩からもこのことが語られるのを聞くことができよう。

Return in peace to the ocean my love,
Behold the great rondure, the cohesion of all, how perfect !
But for me, for you, the irresistable sea is to separate us,
As for an hour carrying us diverse, yet cannot carry us diverse
forever :[62]

こうして，生れながらにして Dionysus の声を聴きながら育った「海の子」Whitman と，肉体的にも精神的にも成人してから始めて「海」と出会った Nietzsche との違いが意味するところは大きく，アメリカの大陸に豊沃と親和の象徴である神の「誕生」を見ようとする Whitman と，神の「死」を経なければ新らしい「神」を迎えることができない Nietzsche とが浮かびあがるのであり，両者における Columbus の出港地の違いも，これと同じ相のもとにあるのだと言うことができるのである。

9．「神」について

前章においてすでに触れたのであるが，Whitman の「神」が，「海」によって象徴され，かれを育ててきた Dionysus であることは，*Passage to India* に現われる God の意味を，Christianity における God と乖離させることは言う迄もない。これを示すのは，つぎの詩句である。

Ah more than any priest O soul we too believe in God,
But with the mystery of God we dare not dally.[63]

このふたつのGodは異質である。前のGodはWhitmanの敬虔な帰依の対象であり，後者は「神」の神秘性をあげつらうことによって神父あるいは牧師の生活の手段と化し，教会の数だけ分化したものである。さらに痛烈なのが，つぎの1行に現われる。

(Let others deprecate, let others weep for sin, remorse,
humiliation,)[64]

これにあらわれるothersは，キリスト教の神のもとにある人間であり，かれらの原罪観，悔い改めに終始する卑小感を鋭く風刺し，それとの絶縁が示される。

その激越さにおいては，Nietzscheが*Zarathustra*のVon den Priestern (On Priests)で行なった祭司達に対するつぎの批難と嘲笑には及ぶべくもないが，意図するところの親近性は認められよう。

They (Priests)* have called "God" what was contrary to them and gave them pain ; and verily, there was much of the heroic in their adoration. And they did not know how to love their god except by crucifying man. As corpses they meant to live ; in black they decked out their corpses ; out of their speech, too, I still smell the bad odour of death chambers. And whoever lives near them lives near black ponds out which an ominous frog sings its song with sweet melancholy.[65]

* ( ) 内は筆者註

WhitmanのGodは，つぎの2行に現われる「完璧な僚友」であり，

(O pensive soul of me … O thirst unsatified … waitest not there?
Waitest not haply for us somewhere there the Comrade perfect?)[66]

また Whitman の神の領域は，人間の魂が登り到達し得る領域である。

Bear me indeed as through the regions infinite,
Whose air I breathe, whose ripples hear, lave me all over,
Bathe me O God in thee, mounting to thee,
I and my soul to range in range of thee.(67)

（下線は筆者による）

この領域に登っても，かれには幼時から耳にし自分の脈動と化した波の音が聞えてくる，前章の「海と Dionysus」の一体観は，思想以上のもの，a priori と言ってよいものであることが証されるのである。

このように，Passage to more than India の終りに到ったとき，つぎの５行に見られるように，

Reckoning ahead O soul, when thou, the time achiev'd,
The seas all crossed, weather'd the capes, the voyage done,
Surrounded, copest, frontest God, yieldest, the aim attain'd,
As fill'd with friendship, love complete, the Elder Brother found,
The Younger melts in fondness in his arms.(68)

人間の魂は，God と相対し競い得るほどに完全なものとなり，friendship と love の豊饒のうちに，「弟」（現身の我）は「兄」（未見の全き我）と合一する。ここで示されている神は，人間を神の領域に引きあげ，人間をその「全き自己」と同化させる，親和と同化と愛情の「神」であり，その Dionysus 性はここでも確認される。引用(43)にある。

are they not all the seas of God ?

も，この神の Dionysus 性から見て，ごく自然な信頼の表現であるといえよう。

これに反して，Jehova の神は，人間を偶有とみて，人間の永遠性を否定するところから始まる。すでに述べたように，Whitman が口にする「神」は，Christianity（と言うよりも教会の神父・牧師達）から見ると，その異教性が際立つのであり，God ということばを使うこと自体がかれらに対する挑戦であった。事実，教会側から相当な攻撃を受けたし，Whitman の葬儀はキリスト教によらずに行はれ，最後まで既成キリスト教と絶縁したままで終わったのである。

Whitman は，教会の神父や牧師が口にする God が，ヨーロッパ2,000年の教会の内外にわたって行なわれた対立・抗争（十字軍，新旧教の血まみれの抗争，異端裁判，魔女狩り etc.）の歴史から，その排他性，偏狭な護教性，純化への異常なまでの執念のために，互いに異質な文化を背景にして多くの民族が集まり，ひとつの社会となろうとするアメリカの「神」となるにふさわしくないと，その鋭い直覚によって悟り，「自己」の追究をつうじて，親和と同化の象徴としての God を誕生させ，アメリカの「神」としようとしていると見てよい。この God とくらべると，Jehova の始源性と絶対性は稀薄に思われるものであり，アダムもイヴも，

> Down from the Garden of Asia descending radiating,
> Adam and Eve appear, then their myriad progeny after them,(69)

アジアから流れ出た人類の流れのなかに置かれ，神の創造物とはならないのである。

Nietzsche はもっと決定的かつ破壊的な態度をとる。God は，もはや人間を救うものではなく，人間が高く昇りやがて自らの主となる妨害であり，人間の「生」を否定するものであるために，抹殺しなければならない。

> Before God ! But now this god has died. You higher men, this god was your greatest danger. It is only since he lies in his tomb that you have been resurrected. Only now the great noon comes ; only now the higher man becomes … lord.(70)

と高人達（学者・思想家・芸術家 etc.）がよく高く昇り神（超人）となる契機が神を殺すことにあると語る Nietzsche であるが，神の死亡を語るとき，神が死亡する時までは生きていたことを同時に告げるものであることを，認識していた Nietzsche であり，かれ自身，牧師の子として育ち，キリスト教の学校で育てられ，思考を一歩進めるためには，この沼地から足を力一杯引きあげなければならない旧大陸の子であったのである。そして苦悩のはてに，永遠回帰の思想を悟ることによって，はじめてこの沼地から脱出して，Dionysus を見つけ出したときは，もう彼の意識の暗闇の寸前であったのである。古い神の死を見届けたあとでなければ、新らしい神（超人）への途に立つことのできなかった Nietzsche と，新らしい神の誕生を眼前にあるがごとくに見ていた Whitman との位相の違いは，そのまゝヨーロッパとアメリカの位相の違いであったと結論づけられよう。

10. 残された視点

Whitman と Nietzsche —— このふたりの「生」の偉大さは，いくら書いても言語のもつ規定力のすき間から流れ出るとらえ難さのうちによく表わされる。

ふたりの比較対照について残された視点のひとつに，この両者の今日（こんにち）性がある。ふたつの湖から流れ出た水が現代の大地でどんな川となっているか，その拠ってくる原因などに，この両者の特性が回顧的にではあるが良い視点を与えるであろう。当然，これと「進歩の時代」との関連は避けられない。

とくに日本に関しては，Whitman 導入の大きな媒体となった内村鑑三の Whitman 観と，ドイツにおける Whitman 観との対極性について考察することが必要となろう。視点をできるだけ多く用意することが，この両者の親近性と相違点をよりよく理解する鍵であることを痛切に感じるのである。

References

(1) 亀井俊介,「近代文学におけるホイットマンの運命」(東京, 研究社, 1973) p.185

(2) ibid., pp. 185−189

(3) ibid., p. 189

(4) Harold W. Blodgett and Sculley Bradley, *Leaves of Grass,* Comprehensive Reader's Edition (New York, New York U. P. 1965) p. 410, fn. 以下 Whitman の詩の引用は, すべて本書による。

(5) Walt Whitman, *A Broadway Pageant*, 1. 22

(6) ibid., 1. 23

(7) ibid., 1. 26

(8) ibid., 1. 31

(9) ibid., 11. 70−71

(10) *Leaves of Grass*, p. 243 fn.

(11) Walt Whitman, *With Antecedents*, 1. 17

(12)(13) ibid., 1. 19

(14) Walt Whitman, *Passage to India*, 11. 10−12

(15) ibid., 11. 20−23

(16) ibid., 1. 111

(17) ibid., 110

(18) ibid., 11. 124−130

(19) ibid., 11. 165−174

(20) *With Antecents*, 11. 37−38

(21) Walt Whitmbn, *Song of Myself*, 1. 1298

(22) Friedrich Nietzsche, *Also Sprach Zarathustra*, (Eng.) tra. by Walter Kaufmann (New York, Viking Press, © 1966), p. 220 (以下, *Zarathustra* よりの引用は, すべて本書に拠る。)

(23) ibid., p. 158

(24) ibid., pp. 215−216

(25) ibid., p. 217

(26) ibid., p. 220

(27) Jan Chiristian Smuts, *Walt Whitman : A Study in the Evolution of Personality* (Detroit, Wayne State U. P. 1973), p. 56

(28) *Passage to India*, 11. 65−67

(29) ibid., 11. 143−146

(30) ibid., 11. 152−159

(31) Friedrich Nietzsche, *Nach neuen Meeren* (Stuttgart, Philipp Reclam jun. © 1964) p. 75（なお，Nietzsche は *Die fröhliche Wissenschaft* の section 124, 283, 289, 291, 343, 377 において Columbus に言及している。

(32) 多田利男編訳，ニーチェ案内：詩と箴言から（東京．勁草書房．1972）pp. 189－190

(33) Walt Whitman, *Gliding O'er All*, 11. 4－5

(34) *Passage to India,* 11. 230－232

(35) ibid., 11. 190－193

(36) ibid., 11. 201－205

(37) ibid., 11. 224－225

(38) ibid., 11. 240－241

(39) *Also Sprach Zarathustra*, p. 221

(40) *Passage to India*, 11. 175－181

(41) ibid., 11. 242－247

(42) ibid., 11. 250－251

(43) ibid., 1. 254

(44) *Also Sprach Zarathustra*, p. 213

(45) ibid., p. 204

(46) Friedrich Nietzsche, *Songs of Prince Vogelfrei : Sils-Maria,* (Eng.) tra. by Walter Kaufmann (New York, Random House, 1974), p. 371

(47) Friedrich Nietzsche, *Ecce Homo*, (Eng.) tra. by Walter Kaufmann (New York, Random House, 1969), p. 297

(48) ibid., p. 302

(49) ibid., pp. 251－252

(50) *Also Sprach Zarathustra*, p. 154

(51) ibid., p. 85

(52) ibid., p. 84

(53) ibid., p. 124

(54) ibid., p. 198

(55) ibid., p. 230

(56) Walt Whitman, *The Return of the Heroes*, 1. 14

(57) 斎藤和夫，「*Old Salt Kossabone* 考」札幌大学外国語学紀要第 10 巻第 1 号，1976

(58) Jan Christian Smuts, *Walt Whitman ; A Study in the Evolution of Personality*, p. 51

(59) Walt Whitman, *As I Ebb'd with the Ocean of Life*, 11. 21－22

(60) ibid., 11. 41－44

(61) ibid., l. 51

(62) Walt Whitman, *Out of the Rolling Ocean the Crowd*, ll. 7−11

(63) *Passage to India*, ll. 185−186

(64) ibid., l. 183

(65) *Also Sprach Zarathustra*, p. 92

(66) *Passage to India*, ll. 199−200

(67) ibid., ll. 190−193

(68) ibid., ll. 219−223

(69) ibid., ll. 88−89

(70) *Also Sprach Zarathustra*, p. 286

(備考) Nietzsche の引用文は，多く Kaufmann の英語訳に拠ったが，英訳されたもののなかでもっとも忠実度が高いとされている。ドイツ語原文と並列して引用するつもりであったが，今回は割愛した。